

10:14 しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じるができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。

10:15 遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれていますとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんととりっぱでしょう。」

10:16 しかし、すべての人が福音に従ったのではありません。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。」とイザヤは言っています。

10:17 そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

10:18 でも、こう尋ねましょう。「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」むろん、そうではありません。「その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた。」

10:19 でも、私はこう言います。「はたしてイスラエルは知らなかったのでしょうか。」まず、モーセがこう言っています。

「わたしは、民でない者のことで、あなたがたのねたみを起こさせ、無知な国民のことで、あなたがたを怒らせる。」

10:20 またイザヤは大胆にこう言っています。「わたしは、わたしを求めない者に見いだされ、わたしをたずねない者に自分を現わした。」

10:21 またイスラエルについては、こう言っています。「不従順で反抗する民に対して、

わたしは一日中、手を差し伸べた。」

パウロは、全人類に共通する”救いに至るための必要条件”に言及します。すなわち「宣べ伝え」られるということで、それはつまり誰かが伝道しなくては、人は救われないということです。

救いのために祈っている人がいるのでしょうか。私たちはそのために何を行動しているのでしょうか。近いうちに誰かが、その人に宣べ伝えるように、祈りましょう。そのために行動しましょう。おそらく、その誰かは自分であるのだと示されるでしょう。

次にイスラエルについてパウロは問題を提起します。「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」という問いかけに対して「むろん、そうではありません。」と結論付けています。

歴史に存在するイスラエルに神様は御自身を表し、律法を与えました。ですからイスラエルの存在は、神が現実の歴史に介入なさるという証拠でもあります。そしてイスラエルの救いもまた神様が歴史に介入して救われるという証しでもあります。

それゆえ神様はイスラエルを現実的に愛しておられるのです。神様が御自身を表す民として選ばれ、そこから苦難の歴史の中で彼らが生きてきたからでもあるでしょう。

それは私たちの個人の人生も同じです。主の証のために苦難にある人は、神様がイスラエルを愛しておられると同じように愛されていることを確信しましょう。またその証しであるイスラエル民族を愛してとりなしましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

